

山科本願寺のお宝

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 出土した輸入陶磁器 中央が酒会壺

はじめに 山科本願寺は、文明十年(1478)に本願寺八世蓮如上人により造営が開始されました。

総面積は約80ヘクタールで、甲子園球場約20個分あります。寺域外周には土塁や濠をめぐらす防御施設を備え「仏国の如し」と称されるほど繁栄しました。しかし、造営から54年後の天文元年(1532)8月に、管領・細川晴元が率いる法華宗と延暦寺、近江守護職・六角定頼の連合軍に攻撃されて焼け落ちました。

2005年にこの山科本願寺の中心

部、「御本寺」跡で行なった発掘調査で、焼き討ちを物語る焼土の中から、めずらしい遺物が大量に出土しました。

輸入陶磁器(写真1・2) 当時的高级品である青磁・染付・白磁・天目など輸入陶磁器の破片が千点以上出土しました。ほとんどが中国から輸入されたものですが、東南アジアや朝鮮半島産と思われるものもありました。なかでも、カラフルな景德鎮産の五彩磁器の碗は、日本では初めての出土です。また、「酒会壺」と呼ばれる龍泉



写真2 五彩磁器

窯産の青磁壺の破片もあります。

玉類(写真3) ガラス玉が370点、水晶玉が2点出土しました。ガラス玉は、青・緑・白・黄・紫の各色があり、大きさも直径2mmのものから8mmのものまで様々です。これらは、発掘した焼土を持



写真3 玉はすべて穴が開き、火災による黒変もある

ち帰り、水洗いして見つかりました。中世の遺跡からガラス玉が出土することは極めてめずらしく、おそらく天蓋瓔珞などの仏具に使用されたものでしょう。

堆黒・金蒔絵(写真4・5) ガラス玉と同じ焼土の中から小さな破片で見つかりました。堆黒とは、木地に黒漆を何重にも塗り重ねて作った漆層を彫刻して文様とするもので、13~17世紀頃の中国製の盆や合子が伝世品として日本にも多く伝わっていますが、発掘調査で出土したのは初めてです。拡大すると、尾長鳥の羽や牡丹の葉、建物の欄干などが精緻な彫刻で表



写真4 堆黒(2倍)

現されているのが見てとれます。金蒔絵は日本製ですが、金粉の発色が良いことから、純度の高い金を用いられていることがわかります。小破片ながらも様々な蒔絵の技法が見られます。元の形はわかりませんが、硯箱や経箱として用いられていたものでしょう。

金属製品(写真6) 純金製の刀子の鯉口や金銅製の飾金具、刀の目貫金具などがありますが、いかにもお寺らしいものとして、散華供養の際に僧侶が花を盛り捧げる華籠と呼ばれる籠の付属金具が出土しています。

まとめ 今回調査した範囲は御

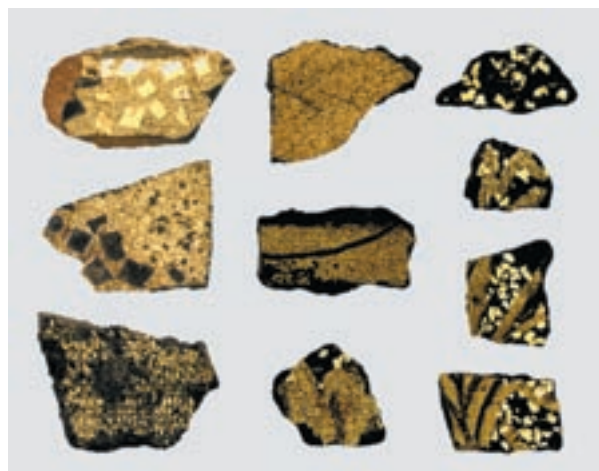


写真5 金蒔絵(3倍)

本寺のほんの一部です。出土した遺物も、本願寺が所持していたお宝の一端にすぎませんが、当時の本願寺の財力の大きさと、優雅な暮らしぶりが浮かび上がってきました。また、その勢いが幕府や諸大名、他宗派にも畏れられ、焼き討ちを招く結果となったのでしょう。当時の公家・鷲尾隆康の日記『二水記』には、その焼き討ちのことが記されています。要約すると「栄華を誇り、仏国のようにであった本願寺が焼き討ちで滅亡した。焼き討ちの晩に京に帰るものは皆、手に財宝を持ち、それは次の日になっても獲り尽くせず、さらに次の日には焼け跡から黄金が出て、それを獲り合う者の中に死者も出た」というようなことが書かれています。京に持ち帰られた財宝は、今もどこかの骨董品屋さんの店先に並んでいるかもしれません。

(柏田 有香)



写真6 左から鯉口、飾金具、華籠の金具